

令和7年度 牧之原市総合教育会議

日時 令和7年12月17日（水）

午後1時30分～午後4時

会場 市役所榛原庁舎4階会議室

●出席者

杉本基久雄市長

橋本勝教育長（牧之原市教育長、牧之原市菊川市学校組合教育長）

【牧之原市教育委員会委員】

吉住幸子委員、池ヶ谷祐太委員、渡辺彩子委員、本目弘昇委員

【牧之原市菊川市学校組合教育委員会委員】

近江賢市委員、八木香代子委員、永田康彦委員、山本和波委員

【事務局（総務部総務課）】

大石総務部長、横山総務課長、大石総務課主幹、田中

【教育委員会事務局】

竹内教育文化部長、永野教育総務課長、小倉学校教育課長、佐藤学校教育課主席指導主事、北西学校教育課指導主事、芝原学校教育課指導主事、杉本学校教育課指導主事、大石学校教育課教育相談員、日野学校教育課主幹、小塙学校再編推進室長、本杉社会教育課長、佐々木スポーツ推進課長、飯田教育総務課主幹

1 開 会

○横山総務課長

本日は、本当大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

令和7年度牧之原市総合教育会議を今から執り行いたいと思います。

本日司会を務めさせていただきます総務課の横山と申します。どうぞよろしくお願いします。

それでは議事等に入る前に、杉本市長よりご挨拶をお願いしたいと思います。

2 市長挨拶

○杉本市長

本日は令和7年度の牧之原市総合教育会議ということで、大変お忙しい中、お

集まりいただきましてありがとうございます。

また日頃から牧之原市の教育行政につきましては、格別の御理解と御協力を賜りますことを御礼申し上げます。

さて、今年もあと振り返りますと、2週間ほどとなりました。今年1年を振り返ってみると、やっぱり9月5日の台風10号に伴う竜巻災害、我々も経験したことない未曾有の大きな災害になりましたけども、被災家屋は1,334世帯に上りました。

全壊世帯が73世帯ということですが、準半壊以上が600戸を超えるというような状況でございます。1,300世帯といいますと牧之原市の全世帯が1万7,000世帯ですから、8%、100世帯のうち8世帯が被災したということですから、いかに大きかったかっていうことがおわかりになろうかと思います。

市では今、復旧復興に向けて、補正予算を2回3回繰り返しまして、32億ほど予算計上させていただいて、復旧復興に向けておりますが、一昨日、これから被災者の皆さんが再建に向かう中での様々な困りごと・悩みごとについて、相談を受けて様々な支援制度に繋いでいくことを目的とした「ささえあいセンター」を立ち上げさせていただいて、本格的に被災地の皆さんがこれから再建に向かうということありますので、よろしくお願ひしたいと思います。

また、市民の皆さんをはじめ、県内外含めて、これまでにふるさと納税や企業版ふるさと納税、義援金支援金合わせまして1億7000万円を超える支援金を頂きました。その大半は被災者の皆さんに生活再建、復旧復興に役立ててまいりたいと考えておりますので、引き続き、御支援御協力を賜りますことをお願いしたいと思います。

そして、災害以外では、今年1年振り返ると、NHKの大河ドラマ「べらぼう～薦重栄華乃夢嘶～」です。

1月から始まりまして、この間の日曜日で最終回を迎えたけども、本当にこの1年間大河ドラマべらぼうで、牧之原市を全国に知らしめることができた。田沼意次の顕彰が十分できたと思っています。

最後には政敵であった松平定信が薦重とタッグを組んで、一橋を島流しにしてやっつけるというような、意次も喜んだであろうというようなシーンがございましたけど、本当にこの1年間、大河ドラマで盛り上がったなと思っております。

今、持ち主の方が、田沼意次のお父さん重意公が吉宗からいただいた刀を牧之原市の史料館に飾ったらどうだということで、クラウドファンディングもやっておりますので、御支援もいただけるとありがたいなと思っております。

目標が500万円ですけど、現在、半分ぐらいまでいっているということありますのでまたよろしくお願ひしたいと思います。

年が明けて、1月12日には市制施行20周年の記念式典を予定させていただいております。

皆さんにも御案内していると思いますが、よろしくお願ひしたいと思っています。

2部では、大河ドラマの記念トークショーということで、歴史に非常に詳しい松村邦洋さん、テレビ等もでておりますが、歴史タレントの堀口茉純さんのお二方で、田沼意次VS松平定信ということで、お2人の功績であるとか、人物像であるとか、一時間にわたってですね、様々なお話をさせていただけるということで、楽しみにしているところであります。

1部で、来賓の皆さんは半分くらい帰り、空席ができるので、市のホームページ、あるいはLINE等で流して、200人ほど席があることを案内させております。まだ申し込みが少ないということですので、お知り合いに声をかけていただい、大勢の皆さんで会場を埋めていただけるとありがたいと思っております。

それからもう一つ二つですが牧之原の話題といえば、坂部に道の駅「そらっと牧之原」が7月18日に開業いたしました。開業して5か月ですけど、来客50万人を達成したということで、ひと月10万人平均を超えられているということあります。当初予定の3倍4倍のお客さんが訪れているということですが、最近、平日については余裕が出てきましたので、お買い物も食事も十分できる環境を整ったということあります。これから地元の皆さんに、活用いただけとありがたいと思っております。

それからあといつかありますけど、給食の無償化っていうことで、国がやつておりますけど、無償化をするなら、国が、別の予算をしっかり取ってやっていただけるといいのですが、現状としましては、国は2分の1を出すと、給食法の改正を行わずに給食費の負担軽減交付金を創設して、食材費相当額を対象として、予算を補助として実施というのですが、残りの半分については、県の負担ということを言っております。

県には交付税を出すということで言っておりますが、全国知事会ではですね、交付税は全体の中でプールされますため、本当にその分がきているかどうかわからくなってしまう。

そのため、県全国知事会は反対しているのですが、最終的には飲むだろうというようなことが言われています。

ただ、問題はいくらに設定するか、全国で給食費は違う。全国の平均が4,700円と言っておりますが、物価高騰もあり、本当に4,700円で来年いけるかということも、わかりません。

だけど、国が基準額を決めたら、例えば5,000円で決めたら5,000円で、2,500円を国で持ります。2,500円を県で持ります。物価高騰で5,500円になりました。

差額の 500 円をどうするのだと、上がった分は市町におまかせします。ということなので、大変ですけど、昨日も中部 5 市町の首長さんといろいろ話をしましたけど、差額分は保護者に負担してもらうのも一つ。お金をもっと学校の管理費とかいろんなもの使った方がいいかとか、いろんなことを相談させてもらいましたけど、お互い、市町で競争し合うのはやめましょうという話はさせてもらったところです。毎年、国が基準額を変更していってくればいいのですが。

国の基準額が課題として残っていますが、年内にはある程度の方向性が出て固まるのではないかと思います。保護者にとってはプラス方向に行くと思いますので、内容もしっかりとしていかないといけないと思いますが、そんなことが今、話題として出ております。

それからもう一つ、情報提供させていただきます。県立高校の在り方に関わる地域協議会が立ち上がってます。来週第 4 回目が開かれ、年度内には、この志太榛原地域の地区ごとのグランドデザインを策定していくということになっております。

皆さん、市の方も学校再編を進めておりますので、御存知かと思いますが、いつも私は申し上げますが、20 年前は牧之原市で 1 年間に子どもが 400 人生まれていました。令和 6 年度については、162 人ということで、4 割くらいに減っています。この状況でいきますと、現在、榛原高校 4 クラス相良高校 3 クラスで、牧之原市だけでなく、近隣の吉田、それから御前崎も 6 割くらいに減ってきてています。

そうすると令和 20 年、去年、一昨年生まれた子どもたちが高校に入ることには確実に絶対数が減っているわけです。

そうすると、現在、相良高校は 3 クラス、榛原高校は 4 クラスですが、県の予測でいくと、相良高校が 1 クラスで、榛原高校が 3 クラスになってしまうだろうということで、県はこの方向性、先ほど言ったグランドデザインですが、この志太榛原地域で一つというようなことを来週会議で示されるのではないかというふうに思っています。さらには私学の高校の無償化がありますので、今よりもっと私学に流れるのではないか。

私学の定員を減らすかつていうことについては、見えてないですね。

そういうことも踏まえると、ゼロになってしまふということを一番避けなければならない。一校は絶対に死守しなければならないので、死守するに当たっては、当たり前の高校を残したいのではなく、特徴のある高校を残す。榛原高校は、もう 60 年経っていますから、施設も新しくするのは当然ですし、中身もみんなが行きたいと思える高校にしなければならないということで、そこをいち早く、志太榛原地域の中でも榛南地域に県がお金を投じてもらうように取り組んでいきたいと考えています。また途中経過というか、方向性が出ましたら、こ

の会議の中でも情報提供をさせていただきます。

また、そういう面においても、御意見を賜るとありがたいと思いますので、よろしくお願ひをいたします。

本日の会議でございますが、協議事項にございますように不登校の現状と校内での対策について、その内容を説明させていただきまして、御意見をお伺いしたいと考えております。

その後、報告事項といったしまして、部活動について、現在の取組状況をお話させていただくということであります。

本日の会議でございますが、協議事項について、この場で何かを決定するという会議ではございませんので、限られた時間の中ではありますが皆様の率直な御意見を頂きたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、会議に先立って、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

○横山総務課長

ありがとうございました。それでは協議事項に移らせていただきたいと思います。会議につきましては、市長が座長となることとなっておりますので、協議事項につきましては、市長に進行をお願いしたいと思います。それでは、市長お願ひいたします。

3 協議事項

牧之原市の学びの保障～不登校児童生徒の対応について～

○杉本市長

それではまず「牧之原市の学びの保障～不登校児童生徒の対応について～」についてであります。それでは説明をお願いします。

●学校教育課 芝原指導主事

【 牧之原市の学びの保障～不登校児童生徒の対応について～の資料を用いて説明 】

○杉本市長

ありがとうございました。それでは説明をいただきました御質問御意見等を伺いたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

○吉住委員

学校教育課の報告を聞いて、実際にやってもらえるなら、どんなにありがたいだろうと私は思いました。本当にやってくださいという気持ちです。

よく考えてみると、私は不登校が増える要因として、学校教育のあり方が現代の社会とかけ離れているのかなと思うときがあります。

今の子どもたちは、秒単位で切り替わる YouTube だとか、私ももちろん見ますけれども、そういう世界で家にいる。そうするとすごく自分の家で居心地がいい。

私の子どもの頃はテレビしかなく、家にいてもそういうものがなくて楽しくもなかったので、学校に行って友達と遊ぶ方が楽しい。

私の世代はそうでしたけど、それがもうあまりにも今は違う。

本当に家の居心地が良ければ、子どもたちは学校へ行くという動機付けだとか、やる気ということを、なかなか出せないじゃないかなと思いました。

集団で同じことを学ぶということが今の学校教育なので、それだけは昭和のまま私達の頃と全く同じということで、放置されているのだなと思います。そうすると、今の子どもたちは、学校をつらく感じるっていうのはもうしょうがないのかなという気がしました。

いろんなタイプがあってなかなか面白いと思って私は見ていたのですけども、私はこの中で要するにこういう今までの学校に代わる、取って代わるような学習ルームのようなものがあるといいのかなと思ったのですね。

現代に見合った子どもたちの学習として、これ実際に実践されているのですけど、シュタイナー教育とかモンテッソーリとか、これは私も言葉だけは知っていますけれども、実態はね、どうなのかよくわからないんですけど、とにかく実際に実践されていて自然体験を通して全人的成長を促して、自ら考え判断して行動できる人間、これは本当に牧之原の子どもたちに是非こうなって欲しいと思うようなものだと思うのですね。

私が学習ルームにすごくこだわって、どういうふうにしてやっているかっていうと、異年齢の混合のクラス、全然年の違うクラスを作る。

それから決まった時間割がないっていうのが、この教育なのですけれども、もうこの二つだけで、「うーん！」っていう感じはするのですけれども、藤井聰太くんなんかは、このモンテッソーリで学んだようです。

そういう例もあるっていうだけなのですけれども、とにかく学習ルーム、ここにも出ていましたけれども、学校に足が向かない不登校の子の居場所であるし、学習する部屋で。

だから、私、自分自身もなかなか今までの学校教育のイメージが変えられないです。けれども、先生方にはね、ぜひこれまでの中学校の生徒指導だとか、特別支援教室のイメージを捨ててもらって、公立学校の中には、フリースクールのよ

うなものができたら効果的かなと思いました。

フルールの先生から聞いたのですけれども、学校に通っている生徒からフルールに通っている生徒を見てなんかあいつらの授業じゃない、授業じゃない別のことをやっているって言われるのが生徒も辛いし、フルールで教えている先生も一番気になるって言っていました。

実際にやった、体験なのですけれども、思い切ってね、学外で、こういうことができないかなというふうに思いました。週に2、3回、午後の1時から畠に集合、畠で解散、そして、ジャージでいいよっていうふうに言うのです。

そしたら多くの子どもが集まって気持ちがだんだん回復して、力を蓄えて、自分の教室に通えるようになったっていうケースが割と多いっていうのを聞いて、納得しました。

だから、この学習ルームっていうのは、特別な人が行くのではなくて、誰もが使えるみんなのための部屋みたいなものができたら、普通の子だって今日は行きたくない日、不登校の子だって今日はもしかしたら行けそうな気がするっていう、一人の子どもの中でもいろんなパターンがあると思うのです。

そういうふうにして、とにかく今までののようなやり方だと、今までどれだけ不登校に私達時間を割いてきたかわからないのですけれども、変わらないなっていうのが感想です。

○池ヶ谷委員

いろいろ情報提供ありがとうございました。

これ見させてもらったりとか、今の話を聞いて思ったのは、行政というか公的な支援っていうか校内の教育支援センターですとか、校外でのフルールの取組ですとか、あと、それに民間のこういうフリースクールだとかっていうのが連携してっていうところは、このまま進んでいったりとかすればいいのかなというふうに思いました。

その進んでいくっていうのはこれをそのままずっと継続してやっていくっていう意味でなくて、その時々の子どもたちの状態ですとか、多様な選択肢を与えるっていうところで広げていったりだと、質を高めていったりいろんなことの連携を広めていくっていうことは必要なんじゃないのかなっていうふうに思っています。

それと繋がって不登校になったときにそれを支援する人たちの質というか不登校に対する考え方だとか、それに接する人の知識とか経験っていうのは、いろんなところで学んでいかなきやいけないのだろうなっていうのを感じたところです。

先ほどの最後、こういうふうに対話の中でやったところもあったのですけれども、

ども、そういう教員としての役割だとかそういうところを学習の中でどうやつて生かしていくかっていうのは、これから授業のやり方ですとかっていうところは変わってきているところなのかなっていうふうに思うところでもあります。

あと2点ですけれども、それはいっても、さっきの昭和の考え方じゃないんですけど、地域だとか保護者だとかいろんなところで今までやってきたこと、自分のときはこうだったっていう考え方方が、なかなか拭いきれないなっていうふうに思っていて。

それは教員もそうですし地域の人も保護者もそうですけども、そういう不登校に対する理解というか、そういうことは、いろいろなところで学ぶ機会はあるかもしれないんですけども、それでもそういう知る努力を自分たちもしていかなきやいけないだろうなっていうふうに思いますし、どうしたら地域の人たちだとか、周りの大人たちが理解できたとか理解しやすくなるのかっていうところは考えていかなきやいけないのかなっていうふうに思っています。

最後に、生徒に対するアプローチっていうのはかなり増えてきたっていうような印象があるのですけれども、保護者は、やっぱり困っているのだろうなっていう話を思っています。

今回、不登校のテーマのときにいろいろ調べたりとか、不登校の全国ネットワークのホームページを見たりだとか、そんなことをしたのですけれども、学校へ行けなくなった子たちの親が、学校へ相談しに行くっていうのはなかなかハーダルが高いだろうなっていうふうに思っていて。

なので、自分の中で悩みを、保護者としても抱えてしまうし、なかなか外に繋げるっていうことが、難しいなっていうふうに思っているので、その保護者がどうやったらこう相談しに行くことができたとか、安心して話せるっていうところをどうやって作っていくのかなっていうことが、課題なんじやないのかなっていうふうに思いました。

そのホームページに書いてあったのは、不登校になることで経済的な負担も大きくなってくる。

具体的に例を話すと、子どもは学校に行くかもしれないから、給食費は払い続けなきやいけない。だけど、行かないで家に子どもがいるから、食事は用意しなきやいけないっていう、そういう負担だとか、自分は子どもが家にいるから、自分の仕事を変えなきやいけないだとか、何かそういうところにも支援の目が向いていくといいのではないかなと思いました。

一番最初に、市長が、これから、ささえあいセンターが竜巻の関係でできるっていう話を聞いて、こういう仕組みがいいなっていうふうに僕は今思っていて、一括で、ささえあいセンターもそこに行けばいろんな支援に繋げてもらえる。

なんかそういうコーディネーター的な支援の仕方みたいなところが、不登校だとかそういうところにもあると、何かここに行けば何でもいろんなところに繋げてもらえて、支援してもらうと経済的にもそうですし子どものことも自分の悩みを話せるっていうところがあるといいのではないかなというふうなことを、最初の話を聞いて思ったところです。

以上です。

○渡辺委員

ありがとうございました。

まず、最初に一つ質問をさせてください。

不登校の定義が年間 30 日ということで、例えば年度の途中で 30 日になってしまったら、それがカウントに入るのですよね。

その後、途中で行けるようになったとしても、そのままカウントに含まれるため、最終的な人数は復帰し、戻った子の人数も入っているので、人数が減っていく可能性があるということでしょうか。

○芝原指導主事

御質問ありがとうございます。

おっしゃる通り、そこにカウントしちゃうのですが、一応、復帰っていう学校から上げてくる欄に丸がつくのですけれども、実際にその通りに全く行かないかっていうと、グラフみたいにはならない、行っている子もいるっていうことですね。

○渡辺委員

ありがとうございます。

とはいえないなかで復帰するのも難しいなとは思っています。

私自身、以前、教室に入れない子が通う、「ほっとルーム」に少し在籍していたことがあるのですが、その時に自分もすごく葛藤をして、教室に行かせてあげたい、行って欲しいと思っていました。

特に 3 年生の後半になると、卒業アルバムの写真撮影日があり、その日に今だけでもいいから、一瞬でいいから入ってごらんと言って、引っ張り出そうとしてしまいましたが、その子、どうしても嫌だったのですね。

この不登校を考えるときに、受け止める側がどれだけよくわかっているかというの、すごく大事だと思います。

今この中に不登校の子の気持ちがわかっている人がどれほどいるのか、という点は考えさせられます。その子たちの気持ちを聞いてないから理解が難しい

のだと思います。例えばあの有名なMrs. GREEN APPLEのボーカルの方も実は、不登校で、学校の勉強よりも何よりも音楽がやりたかったと聞いたことがあります。

現在不登校の子も勉強以外に、もしかしたらやりたいことがあるかもしれない、難しいですが、受け止める側の大人も不登校について学ぶ必要があると感じています。また、不登校じゃない子たちも、どのくらいこの状況がわかっているか、また先ほどの話ですが、その子は普段、教室に行けませんでしたが、何かぱっと戻るときがありました。そのときに、そんな急に授業入って、周りの子たちが受け入れてくれるのかと思うのですが、受け入れてくれたんです。普通に授業に行ってまた戻ってきて。その子は受け入れてもらえたからよかったのですが、もし同じように授業に最近あまり出られていない子が、自分の好きな授業だけ来るなんてずるいと言われたら、その子はもう行けなくなってしまうと思います。

大人だけでなく、受け止める側の子どもたちも、いろいろな子がいるということを理解するよう、何らかの形で伝えていくことが必要ではないかと感じました。

最後に、最近、他の市長さんが、不登校は、といろいろ言って問題になっていましたが、不登校ってよくないよねと言ってしまっているようなものなので、それは問題だと思います。

だからこそ、取り残さないというのは本当に大事だと思うので、フルールなどでつながり続けることは重要だと思います。

以上意見です。ありがとうございました。

○本目委員

市の教育方針「一人も取り残さない教育」という中で、本日の議題に、この不登校を挙げてくださっているってことが嬉しいなって思います。つまりこれが取り残さない一つの取組でもあるんじゃないかなと思います。

今日、指導主事の方がたくさん話をされていたのですが、指導主事もいっぱいやってきたことがあるので、あれだけいっぱい喋るのだろうなって思ったのですが、それだけ熱意を持ってやってくださっていること、やらなければならぬことがいっぱいあると感じました。

それから私も教員として勤めていましたが、不登校生徒とむきあう時、先ほど話に出た卒業アルバムに関しても担任になると、アルバムに載せる載せないから話し合い、別のところで撮った写真を載せるようにするとか、そういうのを、保護者と子どもと話し合うなど、そういうところからやるので、目に見えない多忙というのが、先生方はありました。基本的には先生方は来てもらいたいと思い

ながら対応は当然しているのだけど、なかなかうまくいかないことが多いのではないかでしょか。

話は変わりますが、教員の構成を私は、この頃、ちょっと心配しています。私が勤務していたころ、生活面が荒れた子どもたちもいました。そのころ対応していた先生方が、今ほとんど退職して、当時を知らない若い先生方が多くなりました。先日、相中へ行ったのですが、若い先生方が多かった。なので、そういう中で生徒指導、つまり、発達段階にあわせた児童・生徒への対応に関する研修を教育委員会がリードして先生方にしてもらいたいなと思いました。

それから、委員会としても新たな児童生徒が不登校にならないためのということで、タブレット端末で取り組み始めたことは、一つの提案としてはいいと思います。

指導主事の説明の中で、4日雷にマークがつくと何かっていう話もあったけど、大体問題がある子は同じところにずっと丸付けるんですね。

何も考えないというか。

書かないと怒られるからとか、考えるのが嫌だからって。私が勤務していた当時は、生活ノートっていうか、日記帳の交換ね。

毎日先生と会話するかわり、そういうのも中学校でもやっていました。

晴れとか、ニコニコマークとか、悲しいマークとかそこに丸付けるっていうことはやってきているわけですが、なんで、一つの方策としてはいいけどやっぱり毎日見るだとか、声を聞くだとか。

やっぱり、養護教諭が、1日1回は各教室の授業中に参観してもらうことは、今後も続けてもらいたいなと思います。教育委員会としても、提案された対応も一つの方法としてはいいけど、それだけじゃないっていうことをわかりながら、現在の取組を広げてあげてほしいなって思いました。

それから、自分が勤務してたいたときも非常に助かった心の相談員。まだ教室に行けない子を指導していただきました。学校には来れるけど、でもそれを見る人がいない。それを市が心の相談員ということで、あてがってくださっている。

それを現在も継続してくださっているということは、本当にいいことだし、やっぱり、小学校にも不登校の芽があるのだったら、そういうのをやってくださる人を見つけるのは大変だと思いますが、小学校にも広げてあげる、全校でなくても児童数が多いところでやってあげれば本当に小学校のうちから助かるんじゃないかなと思います。

是非、中学校の実績のもとに、また大変なのかもしれないけど、一つやってもらいたいなと思います。

さらに自分が勤務したときも、発達障害というのは、専門的でないのでわからないので、言語指導員が、年間に何回か回ってくださって、その上で、こういう

特徴がありますよって、教えてくださることで、先生方や生徒同士がその子にむきあう時、助かることもあります。そういうのも県費で大丈夫ならいいのだけど、今そういうのもまだあるのだったら、是非やってあげることが、新たなのはつくらない、対策として有効だと思います。これは、今までのいい取組だったのじやないかなと思います。

それから、フルールに関しては、先日も行かせてもらいましたが、非常にやる気を持って、退職された先生方や相談員の方がやってくださっていました。やっぱり、フルールは実績としていろんなことができてるんじゃないかなって思います。助けられた子どもたちがたくさんいますので、これまでの取組をもとに、できれば、本当にできつつあったそのサテライトっていうのを相良地区にも継続して欲しい。今、B&G海洋センターの前を通ると、工事をされていて、ここでやってるのかなって、私は最初、ここに子どもが来るかなと思いながら、見ていましたが、やっぱり施設がない会議室、場所は作ってくださっただけでも、本当に嬉しいなと思ったけど、やっぱり何もないところに、その日だけ看板立てても子どもは行きづらい、子どもの居場所としては不充分だと思います。市の取り組もうとする姿勢はわかるけど、もう一步進め、できれば榛原地区と同じように庁舎に関係するような市の施設で使ってないようなところがあれば、経費も少なくてすむし、電源も通っていって、さらに指導主事も近くで行きやすいと思います。そうしてもらえると、相良の方も助かるんじゃないかなって思っています。

最後に、是非、フルールを支援センターという形で言うのだったら、極論になってしまふのかもしれないんですけど、市の職員、指導主事かわからないけど、係長クラスが1人いて所長をやれば、福祉とも繋がりやすいんじゃないかなと思います。退職された先生方、会計年度職員のみに任せるんじやなくて、職員が入っていくことで、支援センターらしくなるんじゃないかなと考えます。

○山本委員

先ほどは、ありがとうございました。

聞かせてもらって、一番心配になったのは、38人の子どもがどことも繋がつてないっていうことで、やっぱりそうしちゃうと子どもももちろんのですけど、保護者の方もどう対応していいのかわかんないで、何かあったときも心配ですし、学校って勉強だけじゃなくて、そういう人との繋がりだったり団体行動だったり、いろんなことを学ぶ場ではあるので、ちょっとこれが38人いるっていうのは、できれば早急に何か対策を立てた方がいいんじゃないかなと思いました。

説明にもあった通り、不登校の対応ってこれといった対応がないというか、一

人いたら一つそこに理由があって、100人いたら100通りの理由があるわけで、短期的に何か不登校の数を減らすっていうのはできないと思います。

なので、役場の方にも、短期で1年2年やって結果が出なかったからそれをやめるとかじやなくて、なるべくもっと長期的な目線で考えてこれからもフルール等ですけど対策を考えてもらってやっていってほしいなとは思います。

先ほど本日先生も言いましたけど、先生の目に見えない忙しさということで、子どもたちを普段見ているのは先生であって、先ほどの海山とかお茶コーヒーとか、ああいう会話って先生に余裕があれば、ちょっと生徒とできるんじゃないかなと思うのですよね。

余裕があれば、やっぱり、子どもたちとそういう時間も作れるし、子どものふとした対応、普段と違っている事に目がいったりとか、子どもの教育にも繋がってくると思うので、その先生たち、金銭面にしても時間的にしても、是非とも各小学校中学校、その先生たちが余裕を持てるようなですね、これからも人数等にしてもしっかり配置をしていってほしいなと思います。

それと一緒に、もちろん先生も子どもたちを見ているんですけど、保護者の方ですよね。

保護者の方の価値観は、とても変わってきていると思うので、是非ともその保護者の方に対しても子どもたちと会話をしてもらって、その不登校を未然に防ぐ、先ほどの海山の会話をしていない家庭がね、結構多いと思います。

もう仕事に追われて、送り迎えは小学校から帰ってきたら祖父母の家にいるとか、保育園もそうですね。おばあちゃんおじいちゃんが迎えに来たりとか。ご飯あげたら寝るだけみたいな。そうすると朝はもう登校班に間に合わないといけない。会話する時間があんまりないですよね。

是非ともそういうのは保護者の対応を含めてですね、特にまた地域もですね、地域にとって子どもは宝っていうこともありますけど、是非ともその家族ぐるみ地域ぐるみで、もう少し何か子どもたちとその地域の方、保護者また保護者同士で対応していってもらいたい。

今、学校に保護者が行くっていうのも本当に減っていますので、保護者同士もっと子どものことについて話す場をですね、提供するというか、各学校もう少し強制的にちょっと保護者を各行事に参加させてもいいんじゃないのかなとは思っています。

先ほどもそうですね。有名人がよく不登校とか、今、結構普通に言う人多いと思います。

そうすると保護者としても、そもそも不登校が駄目なのかどうか、別に学校行かなくたっていいじゃんっていう親の価値観の人もいると思うんですよね。

そう言われちゃうとやっぱりそういう子どもを学校に連れてくっていうのは、

とても難しいんじゃないかなと思うので、そういう保護者の方の意見も聞いてですね、いろいろな対応をしていってほしいなと思います。

あとは、去年も言ったんですけど、新規の人をまず不登校なくしたい。そうすると一番の新規ってどこかってなると小学校一年生、そこになったときに、やっぱり保育園との連携をもっと取ってもらいたいなと思います。

保育園の先生、子どものことをよく見ていましたし、家族の事情とかも結構よく知っているんじゃないかなと思います。

架け橋プログラムがもうできている。是非とも、もう少し、特に牧之原なんかはもう三つかたまっていますので保育園小学校連携とってですね、1年生の時点での不登校をゼロにする、そこも目指してやっていってほしいなと思います。

以上です。

○永田委員

いろいろ教えていただき、ありがとうございます。

私が思うことは、不登校には様々な原因があると言われていますので、なかなかその原因を追究することが難しいとは思うのですが、これまでに多くの児童生徒の不登校に対応してきたと思います。その記録や資料を整理をしていただけで、それぞれに良かった対応、失敗してしまった対応、それぞれをまとめて、教師や保護者がその不登校の状況を共有するということが大事ではないかと思います。

児童生徒達の中には不登校になった子に対し、それが誤解でいじめに発展してしまったりするのが、本当によくないことだと思います。状況共有し理解を元に指導が必要ではないかなと思います。

実は私の娘が保育園のとき、小学校中学校までちょっと場面緘黙症の状態でした。

その頃は、場面緘黙症という名称も言われていなかったと思います。親としては対処方法もわからず、どうしたらいいのかと本当に不安でした。

今では名称もわかって、それなりの指導もされたり、治療や支援もあると聞きます。この様々な不登校の原因があるということからしても、今までの対応してきたものが、やはり生かされなくちゃいけないなと思います。

それを一つずつ、教師も保護者もそういう事実を知ることが大事かなと、そしてそれが子どもたちに指導するに当たっても、不登校になっている子は駄目だと決めつけない。また、そう思われないような教育がこれから大事じゃないかなと思います。なかなか見えない原因のわからないところで不安になる子どもたちを安心させて、導いていくっていうことが大事ではないかなと思いました。

以上です。

○八木委員

今日はありがとうございました。

いろいろ教えていただいて、情報も得ることができました。

吉住委員がおっしゃっていたんですが、私も学校教育のあり方自体が現在の世の中と、ちょっとかけ離れている部分があるのかなって、ずっと何て言うんですかね、教育の基本的な中身が変わってない中で、来ているのでそういうところ、根本のところから、こう考えていく必要もあるのかなっていうふうに思います。

シュタイナー教育とか、モンテッソーリの教育とかも、すごくいいことだなっていうふうに思っていて、そういうのをそういうやり方で学べる場を、どこか不登校の子たちが学べる機会があればいいのかなっていうふうに思いました。

先ほど池谷委員がおっしゃっていたんですが、保護者が安心して話せる場っていうのがすごく必要だなって思っていて、やっぱり保護者の方が、子どもが不登校になったときにパニックになってしまってどこに病院に行けばいいのか、ソーシャルワーカーに話せばいいのかっていうそういうところがわからないので、もしできれば、今、介護のこととかは包括支援センターに聞けば、全てどういうところに行けばいいですよっていうのを教えてくれていろんなところに繋げてくれると思うのですが、私も祖母が介護のときに必要でいろいろ包括支援センターの方に助けていただいたのですが、そういうふうに保護者がどこか不登校になったときに一括して相談をてきて、かつ、いろんな支援に繋げてくれるっていう場が一つあるといいのではないかなっていうふうに思います。

包括支援センターだと全てここに行けばいいですよとかこういうことをやればいいですよっていうのを教えていただけるので、そういうことで保護者の負担、心の負担を減らすっていうようなことが、牧之原市が先駆けてそういうことをやっていただけたといいんじゃないのかなっていうことは一つ思いました。

それと、先ほど山本委員がおっしゃっていたんですが、学校行かなくてもいいじやんという価値観を持っている保護者も増えていると思うのですが、私は逆にそういう考えはいいなっていうふうに思っていて、学校にどうしても行かないといけないっていうふうになると、子ども自体もそのプレッシャーとかストレスで余計に学校に行けなくなってしまうと思うのですが、学校に行かなくてもいいよっていうふうに保護者が言っていて、ただ私はそこで心配なのが一番心配なのが学習の機会がなくなってしまって、親がやっぱりそういう価値観でほつといてしまってずっと子どもがひきこもりになってそのまま大人になってしまってっていう状態は一番まずいと思うので、学校に行かなくてもいいけど、やっぱり生徒や児童が学習できる場っていうのは、何らかの形で確保できるよう

になればいいなっていうふうに思います。

なので、今の教育委員がやっているバーチャルスクールとかもすごく、なんか想像以上に生徒が集まっているみたいで、そういうような取組もいいなっていうふうに思いました。

以上です。

○近江委員

今日はありがとうございました。学校組合の教育委員の近江です。

不登校という言葉を聞き始めたのが、調べたら 1970 年代の後半でした。

それから 1990 年代に急増して、そして 2000 年代から横ばいで、2010 年半ばから再び増加傾向で、2020 年くらいから急増しています。そういうことで、もう 50 年来ずっと不登校ということが言われてきました。

今年の静岡県の不登校児童生徒の推移によると、小・中で令和 5 年度に 1 万人を超えて、令和 6 年度は 1 万 1,904 人とこここのところ、増加傾向が強く出ています。

特に心配なのは、小学校 1 年生が平成 30 年は 94 人だったのが、令和 6 年は 370 人というふうに、小学校 1 年生から不登校という数がすごく増えていることです。

それから、中 1 ギャップのために小学校から中学校のときに不登校が増える増え方が、静岡県全体で見ていくと、普段の 3 年から 4 年とか 4 年から 5 年と比べると、3 倍、4 倍以上に増えています。

ということで、小 6 から中 1 がすごく増える。それと同じように中 1 から中 2 もすごく増えています。他の学年の増え方と違う増え方をしています。

この辺のことを理解しながら、対応しなければいけないと思うのです。もうこれだけ長い期間、こういったことがずっと変わらないということは、簡単には減らないだろうと思います。

じゃあ、どうしていったらいいかといこうことを考えたときに私は、不登校の子を含めて、子どもが自立して社会生活を送れるようになるルートがたくさんできることかなと思います。

いろんなルートで学校を通らなくても、何とか自立できていくっていうふうになれば一番いいと思います。不登校が簡単にはなくならないことを前提にして考えての不登校対策として、学校の中のことでいうと、校内支援センターが有効だと思います。牧之原中学校にもできました。すごく心のよりどころになっていて、そこを頼りにしている子どもたちの姿が見えます。学校には行けないけど、教室には入れないけど、まずここに居場所ができたっていうところはすごく大事なところだと思うし、それすぐに教室に戻れなくても、こう続けていくこと

で、だんだん教室に戻れる子も増えていくかなと思います。

それから静岡県版の SEL は、私もカリキュラムを少し調べてみました。とてもいい内容で小学校一年生から中学校3年生まで一貫して、年間4時間ぐらいの時間数ですけれども、積み上げていけるっていうことは、ソーシャルスキルを高める意味ではすごく有効だと思うので、是非、牧之原市でも導入していただけると嬉しいと思います。

あと、学校でいえば、不登校があるのが普通で、不登校があっても、困らないような体制をつくるっていうことがまず大切だと思います。

だから小学校には、ほっとルームのようなところがありませんので、数少ない級外で対応しているっていうのが現状だと思うのです。そういうところを少しでも改善するためにできることなら小学校にもそういう校内教育支援センターを開設して、そういう子たちの居場所を確保することがすごく大事だと思います。

あと、もっと大きく言えば、これは市でできることではないと思うのですが、不登校は、牧之原市だけでなく、静岡県だけでなく、全国の学校で同じような傾向があります。全国で困っているってことは、何かやっぱり教育の形に無理がある。

だから不登校が生まれているっていうふうに自分は考えました。

ですので、もっと教育にかける人の数を増やす努力が必要だと思います。やっぱり忙しすぎます。通常ならば問題はありません。しかし、授業をしながら不登校の子に対応できるかというと、対応できません。そういういろいろなことがあっても対応できるような人がいるということがすごく大事だと思います。

それから、今、35人学級ですけれども、もうこのクラスサイズももっと小さくして30人学級とか25人学級とかっていうふうにもっと欧米並みに、アメリカも大体20人ぐらいです。クラスサイズをもっと小さくすることで、メリットはいっぱいあると思います。そういうことは国全体でやらなければいけないことです。

そういうことを国に働きかけていくようなこともすごく大事だというふうに思います。

それから、学校外で取り組むこととして、先ほど、八木委員もおっしゃいましたが、あの介護支援のように学校のことで困っちゃったこと、不登校とかそういうところで困っている人が、気楽に行けて、そして、そこで相談を聴いてもらいいいろいろなところに繋げてもらえるような、そういう場所があるといいなと感じました。

あと最後ですけれども、自分は、去年今年もデンマークと交流活動をしています。去年は2人ですか、今年は5月に9人菊川で受け入れ、そして、一緒に活動

しました。その中で知ったデンマークの学校、フォルケホイスコーレという学校があります。

これは法律に基づいて約 70 校が運営されていて、17 歳半以上だったら、国籍を問わず誰でも入学できるっていう学校です。学習できることは、それぞれの学校によって特化されているのです。入学できる資格や学位は不要で、学費の多くは国が補助してくれる。そして指導者と生徒が寝食をともにするっていう学校です。

デンマークは、九州よりもちょっと大きいくらいの小さな国です。

その中で 70 校をつくったってことは、これはすごくその国の教育方針というかそういうものがあると思います。いわゆる学び直しとして、例えば 20 歳になって挫折しちゃってどうしていいかわかんなくてその学校に行って立ち直って、また社会復帰したとかいうことです。私達の仲間の子どもさんも今、一人フォルケホイスコーレに入学しました。その人は映像関係のことを勉強しています。そこで何か資格がとれるというわけではないんですけども、そういう学び直しができるところが良いと思いました。

それは、例えば 40 になってからも 50 になってからも、そういうふうなことがあるかもしれないし、国の形としてすごくいいなっていうことを思いました。日本でそういうのができるかどうかは、それは難しいと思いますけれども、でもこういう考え方で、子どもたちが、社会で生活していくようになるまでの一つのルートとしてこういうものがあればいいなということも思いましたので、参考までにお話をさせていただきました。

以上です。

○吉住委員

八木委員がおっしゃったように、本当にうちのまちの福祉は、ものすごくうまくいっていると思います。私もおばあちゃんのとき、こんなにうまく動いているなら私、介護保険いくら払ってもいいわって思ったんですね。

だから、それが確かに教育には今のところない。

そういうのはどういうふうにしたらね、お金はかかるのですけれども、どういうふうにしたらできるかなって思いました。

○八木委員

包括支援センターは本当に福祉のこととか介護のこと全般を何聞いても教えていただけたので、大変助かったんですけど、その教育とか不登校のことで、そういう何か組織があれば、保護者とも子どもも心強いんじゃないかなと思うのですけど、何かどういうふうに作ればいいかっていうのは、私も難しくてわから

ないですし、こうね、包括支援センターの場合はケアマネージャーさんがいたりとかしてやっぱり介護や福祉の専門の方がいらっしゃるので、できると思うんですけど、教育とか不登校の場合はどういった専門の方を連れて来ればいいのかなっていうのはちょっと。

○芝原指導主事

委員がおっしゃる通りだなって、自分も思っていて、やっぱり不登校の要因といえば保護者の要因が大きいところ、保護者にアタックした方が良くなるっていう御家庭もあるところはですね、福祉相談課の家庭係と、例えば経済的な食料支援をしてみたりとか、生活保護みたいなところを提案したりとか、あと専門家っていうと学校ではスクールカウンセラーを通してスクールソーシャルワーカーさんが、医療とかいろんな関係機関を繋げる方がいらっしゃいますので、カウンセラーさんとか学校の方に言いにくいところがあると思うのですけども、繋がる。もし学校に言いにくいのであれば、そういった窓口が県の方もそうですし、そういったところが他にも、県の事務所のところにもあるので、そういったところもあります。

おっしゃった通り周知っていうのは今後も続けていくし、言いにくいっていうこともお話にありましたハードルがあると思うんですよね。何聞いていいかわからないとか、言うことにちょっと抵抗があるっていうのがあると思うので、ここも皆さんのお話になって出てきた周りの大人もそうですし、周りの子どもたちへの声掛けも大事になるのかなと思います。

○近江委員

不登校がこれだけ増えていますので、市の方でそういう専門の相談窓口を作っていただきたいと思います。

まずホットラインを作って、そこで悩みを聞いてもらって、そこからどこかに繋げていただくとか、そういうふうなものがあるといいなと思うのです。親は子どもが学校行けなくなると辛いなって思って、やっぱり悩むと思います。最初から学校なんか行かんでいいよっていうふうに思う親は多分いないと思います。

子どもも、「あいつなんか怠けているじゃないか」と思われるなどを気にしたりして嫌悪感みたいな、そういうものを持つこともあると思います。

まずはホットラインで、そしてそういうところを専門家としての力量を持っている方が対応していただくことが良いと思います。

親の考え方とか親の気持ちのサポートとか、子どもの気持ちのサポートとかサポートすることはいろいろあると思うのですけれども、そういう窓口ができたら嬉しいなというふうに思います。

○杉本市長

今、皆さんからの話をずっと聞いていて、ほとんど共通しているなって感じたのが、不登校になった親御さんが、保護者が安心してね、相談できる。

そういったのが福祉の関係でね、包括支援センターが出るじゃないですか。

今、実際に市内にそういった相談窓口って電話何番掛けりやそこで相談できますよっていうのが、これあるのですか。

○芝原指導主事

「パパママ子育てだいじょうぶっく」というのが紙でつくられていますので、そのところにかけてもらえば、不登校の関係するところ、親の会やフリースクールの連絡先が載っています。

あとは、例えば保護者会みたいなものは、県が出しているホームページにも載っています。

そういう窓口のところは、牧之原市もその部分に入っているので、そこでも探し当てることはできます。

○杉本市長

だいじょうぶっくに載っていると言われてもよくわかんないのだけど、フリースクールにいきなり繋げるとかじゃなくて、まずは親御さんのね、不登校になっちゃった親が、まずはこうなっちゃったんだけど、どうしたらいいんですかっていうところのよりどころっていうかな、それが欲しいんじゃないかなって皆さん言っているのはね。

だからフリースクールへ繋げればいい、それはちょっと違うかなって、気がするんだけどね。

なので、一番初期の状況だと、何となくこう感じるんだけど、初期の状態だと、完全に学校に行かないっていうよりも行っているんだけど、だんだん徐々に行けなくなってくる。

だからその病気じゃないけど、早期発見早期治療じゃないんだけど、そこでケアしてやることによって親も子どもも立ち直れるところってあるのかなと思うんだけど、そういうところはないんですか。

○芝原指導主事

市長がおっしゃられたように、分割してここっていうところはなかなかないのかなと思うんですけども、窓口は広くあるので、例えば福祉の女性相談の方から、うちの子がっていうふうにいくこともあるし、学校のカウンセラーさんか

ら入ってくることもあるし、担任の方に言える人は言えるかなと思うんですけども、一概に、こここの場所っていうのは確かにないのかなとは思います。保護者の方もやっぱりすごい悩まれるんですよね。自分も子どもが4人いるって言ったんですけど、やっぱり娘も今日学校行きたくないってときに、ここは休ませた方がいいのか、それともそれぐらい行けよって悩むんですよね。意外に行ってみればよくなったり、そういうふうな子もいるし、逆にそれが苦痛で、余計不登校になっちゃう子もいるっていうと、やっぱり正解はなかなかその子、その御家庭によっても、あるのかなって思います。

逆に言うと、ちょっと話も出てくる保護者の中には、もう全く学校がアタックしても結構ですって、逆にそれが嫌ですっていう方もいるので、そのアプローチの仕方っていうのが難しいなっていう中で、うまく相談にあう窓口、適切な窓口っていうのは、それぞれあった方がいいのかなと個人的には思ったりもします。

○竹内教育文化部長

不登校についていえばですね、当然子どもが学校に来なくなるということなので、まずは学校の担任の先生だったり、校長先生だったり、学校が窓口になると。加えてその学校の対応だけでは足りないということになれば、教育委員会の学校教育課が窓口になっているというのが現状なのですが、その原因だとか対応がですね、学校教育の範囲の中だけに収まらないといったところに少し問題があって、そういったところについては、現状でも福祉の関係ですとか、専門家を入れたチームの体制の中で対応しているということになるのですが、今、委員の皆さんおっしゃるようなもう一步踏み込んだといったところは、御指摘いただいた通り、今後必ず必要になってくるんだろうなっていうことは認識しているという、そういった状況です。

○杉本市長

先にちょっと私の方から、皆さんの言っていることはそういうことっていうかね、いくつもその窓口を作るっていうよりも、さっきも意見として出たのは、100人いれば100通りあると、その話を聞いてあげるところがあって、そこから、この子は福祉の観点だよねとか、この子はこうだよねああだよねっていうふうに繋げてあげるっていうか、そこの必要な場所、そういうコーディネーターが必要じゃないかっていうふうに僕は今、皆さんのお話を聞いていて、そう思うんだけどね。

なので、そこの窓口を設けるというのはそんなにハードルは高くないんじゃないかなと思う。

専門の繋げる人がいればね、話を聞いてあげるっていうのが大事であって、た

だ子どもが不登校になりました。学校から呼び出しで、親が先生からああでもないこうでもないって言われたって、親御さんは、保護者は解決しないんだよね。

ただ困ったよっていうだけで、じゃあ何か先生から解決策が出るかっていうとそれなかなか難しいと思うんだよね。

なんで、そこを繋ぐ場所が包括支援センターのような窓口がね、あるといいなっていうことじゃないかなというふうに聞いていて思ったんだけど、どうですかね。

○橋本教育長

先ほどのですね、市長の冒頭挨拶のささえあいセンターから、こういった機能を果たすところが必要ではないかっていうのは、私達のところにも相談場所はいくつかあって、この不登校に関するいろんな相談ができるところはどうしたら構築できるかっていう部分を、今後また検討させていただきたいなと思っています。

今、委員の皆さんのお話を聞いていて、昨年に続いて今年も同じ不登校をテーマにした会議なんですけれども、それだけ先が見通せないというか、これといった対策を打ち出せないまま、ただ何もやってないわけじゃなくて、芝原からこれもやっていますっていういろいろ紹介をさせてもらったんだけど、それでもなお何人かは不登校になってしまい。その繰り返しがずっと起きているという状況であります。

先ほどの相談の窓口っていうのは、また検討させていただくということにして、今やっている中で、やはり学校には行けるけれども、なかなか教室に入りづらいだとか、それが徐々に溜まっていって学校行かなくなってしまう、学校に行っているけど、教室に居場所がない、学習になかなかついていけないっていうところを、校内教育支援センター、中学校のほっとルームのようなものが、今、小学校にはそこを面倒見るっていうか、そこで対応する人がいないので、級外の先生や養護教諭の先生が対応しているような状況だと安定して運営できない関係で、そこを何とか手を加えていきたいと思っています。

国の政策もその方向に向かっているし、静岡県もそこを来年度増やしていくという方針を示しています。牧之原市としても、そこは何とかお願いしたいという要望は出しています。予算の関係になると、全校配置というのはなかなか難しくて、活用されてない教室に子どもが安心して学べる自分の居場所をまずはつくって、そこに人を配置するような形をとりたいなと思います。

今、自分が考えているのは、学習支援の支援員は各小学校についていますけれども、この学習支援というのをもう少し幅広く捉えて、学びのサポーターとして、その子の学びのサポーターみたいな形で、支援ができるような形が取れれば、今

より少しは改善するのかなって思いました。

ただ、先ほど委員の皆さんから出ているように、支援員は誰でもいいのかっていうと、そこに問題があつて、やはり子ども一人一人の悩みだとか、そういうところを支えられるような、どちらかというと、学習指導というよりも、心の内面に添つていけるような人が求められるのかなと思っています。

そういうことを充実させていくことを徐々に取り組んでいきたいなと思っています。

あと、また話を戻しますけれども、保護者の悩みを相談できるところも、今後考えていきたいなと思っています。

ありがとうございました。

○杉本市長

今の教育長の話も含めてもう一言、言っておきたい方ありますか。

○本目委員

予算の関係って言っちゃうともう難しくなるので、できればコミュニティスクールどこもあるので、できれば、あの名前だけでこういうのやってもらえるかわからないけど、主任児童委員さんだとかね、そういう人がコミュニティスクールの関係で、その勉強じゃないけど学校に来る子、心の相談員がいないところ、時間的に、その人がいいよっていう時間と合えばね、そういうのを来てもらうよう、何かディレクターさんが声かけるだとか、そんなふうにコミュニティスクールが広がってくれるといいんじゃないかなと思いました。

○杉本市長

ありがとうございました。

あと、さっき近江委員から話があった 35 人学級 30 人学級とかね 25 人学級とか、人数じゃないという話もあるけど、でもやっぱり今の時代先生が大変になってきているっていう中で、できるだけね、35 人が 30 人とか 25 人とか、特に低学年はその方がいいんじゃないかと感覚的で申し訳ないんだけど現場わかんないもんで。

それって例えば 35 人学級と子どもの教室の人数が多いところの方が不登校が発生するちょっと統計上の率があるのか、少人数のとこなら不登校が少ないので、何かそういう統計的な数字ってあるんですか。

一概に言えないよっていうのであれば、一概に言えないようで、例えば 35 人学級だとクラス替えがないけど、25 人学級だったらクラス替えがあるじゃんってことにもなるんじゃないですか。

なので、確かにそれ全部こうやつたら国が変えてくれりやいいけど、県が変えてくれりやいいけど、だけど、全部やるじゃそれは大変なんだけど、例えば小学校1年生2年生はね、そういうふうにして、1クラスだけじゃなくて、2クラスに3クラスにできる分割するようなことをやつたらそれって効果あるのかないのか僕はわからんけど、そうするのも一手じゃないかな、みたいなさっきその先生が本当に子ども一人一人に目が届くとか、先生が一人一人と1日1回は対話するとかね。

子どもにタブレットで晴れ曇り雨なんてね、つけさせるよりもその方が、さっき本目委員も言ったけど、そういうふうに僕も思うんだけど、その辺って教育する側としてどうなんですかね。

○橋本教育長

やはり、教師が子どもと触れ合う時間っていうのは、自分が若い頃に比べて減ってきてていると感じます。それはもっと人数多かったんですけども、休み時間にドッジボールやつたり遊具で遊んだりとか、いろんなことをやってきたんだけども、今はどうなのがなってっていうのは思います。日課がきちきちと組まれている中で、一人一人の様子を見ていて、会話を通して、この子家で何かあったかなっていうのは、教師だったら感じ取れる部分があると思うんですよね。

ですので、晴れ曇りとかじゃなくても、それは教師の目が行き届けばできると思います。本目委員どうですか。

○本目委員

人数が、少ない方が見れるっていうことは、本当に市長が言うとおりなんんですけど、見る人の人数が決まっているので、どうしてもできないんじゃないかなっていうか、どうしても2人しかいないときに3人、三つのクラスつくっちゃうと、もう1人見る人がいないのでって、ということなんですよ。

どうしても、したいけどできないんじゃないのかな、増員ということであれば、いやそりやそうですけど、それはいいです。それならできます。

○杉本市長

この間、新しい学校の視察に行ったとき、何か小規模な何かね。いわゆる定員を50人なら50人しか、45人としか取らないと、そうすると必然的に20人ぐらいのクラスが二つできるという発想もあるじゃないですか。

なので、そうすると、法的に、法的にというか、今の制度の中で2クラスできちやうみたいなね、そういうやり方も全部の学校をやるわけにはいかないかもしれないけど、一つの学校はねそういうふうにするっていうこともありなのか

な、みたいなね。そういうことも含めてこれからさらに深めていく必要があるかなって思いましたし、時間もそうですね若干過ぎましたので、最後にしますけど今日出た意見の中でやっぱりその保護者がね、安心して相談できる場所、あの繋いであげる場所っていうよりどころがあつたらいいねっていうのと、それからやっぱりその不登校になった子が確かに団体行動とかいろいろあるかもしれないんだけど、団体生活とかでも、最低限その教育を受ける場っていうのは、これやっぱりつくっていく必要があるだろうっていうのは、皆さんのお見を聞いて思いました。

学校行かなくてもいいけど、でも学校行っているのと同じだけの教育を受けられる。だから教育を受ける義務っていうか、あるんだけど受けさせる義務っていうかね、そこも僕はあると思うので、これ今、これだけその不登校の子が増えてくると、そこも考えていった方がそれはお金かかるかもしれないけどそういったところをやっぱり一つの自治体だけで抱えるだけじゃなくて国としてやっぱりそういうこともね、真剣に考えていかなきやいけないだろうし、県としてもそういうところの支援を考えていかなきやいけないだろうし、学校の先生の加配っていうのはもう県と国に委ねられているので、市単独でやれんことはないけども、そういうのも含めて、周りの市町も含めてね、あの検討する必要あるだろうっていうのを皆さんのお見聞いて、思いましたので、本当にいろんな意見をいただきましたけど、ありがとうございました。

これを参考に、また教育委員会の中でも検討していただいて、一つでも解消できるというかね、回答できるように頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いをいたします。

4 報告事項

牧之原市の部活動について考える
○杉本市長

それでは、報告事項ということで「牧之原市の部活動について考える」をですね、報告していただきますので、よろしくお願いをいたします。

学校教育課の杉本指導主事からお願いをいたします。

●学校教育課 杉本指導主事 【 牧之原市の部活動について考えるの資料を用いて説明 】

○杉本市長

続きまして、部活動の地域展開に関連することとして、市職員のですね、兼業制度を検討しておりますので、指導者不足を補うために市職員が担うもう一つの役割、牧之原市職員の兼業について報告をさせていただきます。

総務課の大石さん、よろしくお願ひします。

●総務課 大石主幹

【 指導者不足を補うために市職員が担うもう一つの役割～牧之原市職員の兼業について～資料を用いて説明 】

○杉本市長

報告だけだということですが、何かこれだけちょっと一言、確認したいとか聞きたいとか、何かあの意見あればせっかくの機会ですので、もしあれば、いかがでしょうか。

○山本委員

前も掛川に、講演というか勉強会みたいなので行かせてもらって、部活動のことについてあったんですけど、牧之原市も今度令和12年ここに義務教育学校スタートっていうことになっています。

地域展開していく中で、そして義務教育学校ができる中で、ちょっとその時も同じような質問をさせてもらったんですけど人数がいないんで、各部活もしくはクラブを小学校中学校一緒にやっていくと思うんですよ。

でも例えば中学の大会には小学生が基本的には出れないと思うんですよね。

そこをこれからどうしていくのか、もしくは国から何かあるのか、またちょっと何かあればちょっと聞きたいなと思いまして、小学校6年生体格差はあるかもしれないんですけど、中学校の大会に出てもいいんじゃないかなとか思っちゃうんですよね。

上手な子だったら、というか、そもそも小学校を入れないと大会に出れないとか、そういう問題が出てきちゃうと思うんで、練習は一緒にやっているけど、全中だからちょっと出れないみたいなのは、ちょっとかわいそうかなと思うので、その辺また市としても国に言ってほしいなと思いましたし、もし何かあればよろしくお願ひします。

○杉本指導主事

はい、ありがとうございます。小学生も入れるように後々なればいいなって僕も思っています。

ただし、競技によって小学校と中学校の境目で、いろんな規格が変わる競技が

多くて、例えばソフトボールだったら2号球から3号球になるとか、墨間の距離が変わる、ピッチャープレートとホームまでの距離が変わるなどいろいろあるので、なかなかこの中学校の人数が足りないからっていう理由で小学生がやれるかっていうと、すごく難しいなって思っています。

ただし、例えばソフトボールだったら人数不足を解消するために、6人制のソフトボールの大会を協会の方がつくってみて、試しにやってみるとか、大会の主催者がどういう考えでいるかによるかなって思っていまして、今、中学校でメインとなっている大会で中体連っていう組織があるんですけど、そこも持続可能な形を一生懸命考えてくれています。

中体連の規格っていうのは、競技ごとに参加規約っていうのが実は決められていて、こういう条件じゃないとこのチームは大会に出られませんっていうのが、全部競技ごと決まっているんですよ。

なので、その競技の中でどういうルール、参加規約にするかっていうのは、競技の代表者で実は検討されています。

現状を見ながら、もうこの規格で、小学校5年生からやれるようにしようよとかそういう話っていうのは、競技ごと相談されます。中体連という組織とは別に、いろんな大会に協会とか連盟とかっていうものがあって、主催によっていろんなルールが存在すると思うので、時代に合わせて大会が変わってくるかなっていうふうに期待はしています。

今は多分、厳しいです。いろいろ変わってくれないと。

ありがとうございます。

○杉本市長

あと、焼津とか何かが、もう中体連から抜けるとかっていうような話もあったんじゃないですか。その辺どうなんですか。

○杉本指導主事

学校部活動としての参加をやめるって言っていまして、中体連の方としても実は中体連のルールが追いついてなくて、どういうところだったら部活としてカウントしようか、これはクラブとしてカウントしようかっていう境界を引くのが、今すごく困っている状況です。

地域クラブっていうのは、例えば軟式クラブで複数の学校からうまくなりたい子だけを集めて選抜のように扱っているクラブと、初心者からでもいいよって言って学区にいる子を集めてやっている部活と同じ土俵で大会をやっていいのかっていう問題があるので、地域クラブはクラブ枠ってところで実は出るようになってます。

部活動は部活枠っていうので出るようになっていて、先ほど言った地域の認定クラブはどっちなんだって言ったときに、部活動の後釜って考えると、部活枠で出ることがいいでしょうということになっているんですが、ルール作りが追いついていなくて、最速で令和9年度からの対応になるそうです。

なので、来年度は焼津が部活としては出ないって言ったときに、とはいうものの、今、合同部活動、本市も野球部は三校合同で部活をやっています。吉田も入って合同チームになっていますが、これと同じ扱いにして、蓋を開けてみれば、地域クラブなんだけど、3校4校が集まっているっていうのは、3校プラスアルファっていう合同部活動の枠に実は収まるんですよね。

なので、令和8年度は、それは合同部活動として出たらどうだっていうことを今言っているという状況なので、実態はクラブなんんですけど、最後の大会、令和8年度だけは合同部活っていう名前で出てくる可能性が高いということは耳にしています。以上です。

○杉本市長

はい、ありがとうございました。

何か国の方も、その補助制度が大きくな、変わってくるっていうこともあるので、乗り遅れないようにやっていかにやいかんっていう、今話聞いていて思いましたし、それから、アンケートを取ったら部活をやってもいいよっていう先生が1割しかいないっていうのが、すごい僕はショックです。

僕は、なんていうのかな、僕はあんまり勉強好きじゃなかった。なんだけど、やっぱりその部活動っていうところがあつてこそ、やってこれたかなっていうのはあるし、未だにずっと、あの高校卒業して50年経つけど、未だにその連中とはずっと付き合っているし、僕はその部活動とスポーツだけじゃなくて、文化もそうなんだけど、人づくりの場もあると思うのね。

なので、そこが教育じゃないよっていうかね、そこからこう切り離すような考え方を国が制度としてもう認めちゃっているっていうところは、僕は違うんじゃないかなって僕はこれ個人的な意見なんだけどね。やっぱり勉強とその部活動っていうかな、ここは絶対両立しなきや文武両道ってね、思うので、そこがすごく残念だなって思うし、それから今、精神的に結構病んじやう子が多いっていうかね、市役所の職員の中でも結構いるし、あの学校の先生なんかもそうかもしれないんだけどでもやっぱり相対的に見ていて、スポーツをやっていた子ってね意外と忍耐力があるなっていうのをずっと職員見ていても思うのね。

なので、そういう意味では、すごく勉強も大事なんだけど勉強だけじゃなくて、部活動っていうのは人生にとって人づくりにとってすごく重要なので、これはやっぱりしっかり対応しなきやいかんって思うんですよね。

なので、外へ求めるなら外へ求めるで、やっぱりそこはスピード感持って受け入れ先をしっかり作らにやいかんっていうのは思いますね。

もう一つは確かに市の職員が兼務かならないのか。でも、そこもやっぱり限界があると思うので、今やっぱり人生 100 年 120 年時代で 60 とかね。

65 で今定年になるけど、それから 10 年 15 年、十分やれるんですよね。

なので、今僕陸上とか駅伝なんか見ているけど、結構もうね 60 後半とか 70 代の皆さんのが頑張ってチーム作ってやっているんですよね。

なので、そういう面では、僕は現役世代だけに求めるんじゃなくて現役世代から、次の本当に高齢者になる間の 10 年 15 年というのをもっと楽しめる人生というか、生きがい作りじゃないけど、そういうところの層の人たちをまとめていくのもね、一つの担ってもらうところを探すためには、いわゆるスポーツ協会の中に各部があるので、そういうところと、もっともっと連携をしていくと出口が見えてくるんじゃないかなっていう気がするんですけど、そんなことも含めてこれからしっかりと対応していきたいなっていうのを感じましたので、私のこれ意見ですけど、よろしくお願ひしたいと思います。

もし何か皆さんあったらあれですけど、なければこれで終わりますけど、どうぞ。

○近江委員

先生方の 9 割が部活の顧問は希望しないっていうことで、私はその気持ちすごくよくわります。休日を対外試合とか、練習で出でていかなきやいけないんだけれども、同時に家庭の中でやらなきやいけないこととか自分の子どものためにやらなきやいけないこととか、社会的ないろんなことでやりたいことがあると思います。

だから顧問は希望しない方を選ばれるんだなって思います。それは当然だと思います。

だから、そのために地域移行というか、地域展開っていうことを考えられたと思います。

だから、普段の仕事でもね、夏場は夜 6 時半まで部活指導して子どもを下校させて、7 時過ぎてから明日の準備っていうような仕事の状態が続きます。

そういうパターンもできれば、なくしていくか、緩和していくとか、そういうことを考えなきやいけないと思います。

そういうところを考えながらの地域移行、地域展開なんですけれども、牧之原市には、「まきのはら塾」があります。そこには、いろいろな学びのメニューがあります。そういうところも、いわゆる趣味を広げるとかそういうふうな感じでもいいので活用できると思います。

だから平日は部活をやって、土日はまきのはら塾に所属する。平日は部活をやって土日もその地域展開の外部クラブに行く。平日は何もやらないけど、土日は地域展開の茶道を勉強するとかいろんな選択肢があるといいなと思います。菊川市は今、そんな方向で、地域展開でそういういわゆるお花とか、そういうことをやれる団体といろいろ協議をして進めていると思います。そういう形で土日がもっと自分の将来に夢を広げるような活動ができればね、十分、部活動に変わることができます。

そういう意味でいろんな選択肢があると思うので、是非、ご検討していただけたらというふうに思います。

以上です。

○杉本市長

どうもありがとうございました予定の時間を上回るですね、皆さんからの熱心なご意見を賜りまして、ありがとうございました。

それではですね協議事項および報告事項は以上とさせていただきたいと思います。

それでは進行をお返しいたします。よろしくお願いします。

5 事務連絡等

○横山総務課長

それこそ貴重なご意見賜りまして、本当にありがとうございます。

最後に、連絡事項として、本日の会議なのですが、会議録を作成しますので、また委員の皆様に御確認をいただきますようお願いしてまいりますので、その際は御協力をお願いしたいと思います。

6 閉 会

○横山総務課長

それでは、以上をもちまして令和7年度牧之原市総合教育会議を終了させていただきたいと思います。

本日はありがとうございました。